Story of a inside-river

内川語り

VOL. 5

Copyright © 2003 年 吉田征夫

The first

水音を発しながら川は流れている．緑の豊かな水量は幾重にもボリュ－ムのある曲線を見せて, 見ている人を吸い込むようなうねりである．陽光は柔らかく川の面にキラキラと眩しく揺らいでいる．水の飛び跳ねる音を集めて川は次から次と流れ下っている．穏やかな日である, 本当に白雲が一, 二つと青空のなかに浮かんでいるのみであり, じっとしていると, 陽の暖かさが, もの憂いように眠たさを誘ってくる．

風も無いせいか水の匂がそのまま川岸を離れない．川の流れを囲い下っている堤道には, 梅の花が咲乱れ淡いピンク色, 浅い竹色, 白色と様々に開花を誇って辺りに甘味している．川幅は十間もあろうか, その両岸に流れがあたり波が砕け川の中程は水量が幾重にも次から次とうねり見せて, それは, まるで川底より水が尽きることを知らないように, 次から次と湧き出ていると錯覚する様な流れである．

太陽もだいぶ傾き落日の陽が差し込み, 土手の中腹に眠っていた貴はクシャミとともに目を覚ました．やはりまだ三月の季節, 陽が傾き始めると肌寒さがあった． 上半身を起こすと, さらにクシャミを二, 三回続き貴はそれから身を震わせた．急に身が引き締まり, 彼は外川の流れを背にすると家路と帰り始めた．

　どの田もうねり返され藁屑が撒かれているが．人気もなく寒々した田の続く中を貴の歩きは自然と足早になった．畦道の脇にひかれている水路にはまだ水はなく, その中をてくてくと歩きすぎ, やがて, 渋井の辻に出ると貴はどの道を取るかはたと迷った．それは, 渋井の家並みを通って古市場河岸, 福岡河岸に架かる養老橋を過ぎるか．それとも内川の花の木の渡しを行くかの別れ路である．

大宮から福岡村に通じる街道も, 志木から川越へと通じる街道にも, 生憎, 人も荷馬車もその気配すら見渡らなかった．桃色の花弁を見事に咲かせている梅の木が辻に被さっていた． 子供の頃とは辺りの景色が変わらないにしても, 道幅は幼当時はもっと広かったように思えたし, 外川 (荒川) まではもっともっと遠い道程と思っていたが．あらためて訪れてみて, 道幅は荷馬車が行き交う程度の広さしかなかった．外川までは思ったよりも遠くはなかった．それにこの梅の木もあの頃は目には入らなかった．

内川の船頭として育った貴は陸に上がってしまったとしても, かっての河岸場を通り行く事に心が躊躇した．その血の騒ぎを静める

ように, 貴は辻の梅の木を平手で軽く叩きながら思案していた. 辺り一面に田が続き, わずか二町ほど先に内川のそれとわかる葦の繁みが田の中に曲がりくねって走っている.

荒川の流れは, 川越から千住の大橋辺りまでを『外川』と土地の人々には呼ばれていた. それというのも, 川越から新倉の荒川への合流地点まで新河岸川が荒川と愛い添そう様に流れ下っており. それで荒川を外川, 新河岸川を内川と呼んでいた. 荒川の大きな流れと違って, 内川のそれは小川であり幾重にも曲がりくねっている流れである.

江戸時代より陸の川越街道よりも, 荷の運搬にはこの内川の船運が繁栄した. 時代が明治に移ってもその繁栄は続き, おそらくその辺りが最盛期であったのかもしれない. 江戸が東京になり, 鉄道が東京—大宮—高崎と敷かれると船運の荷は半分にがたっと減った. さらに東京—八王子, 川越—国分寺, 川越—大宮と鉄道が敷かれ. それらが継ながると, 内川の水運は衰退していった. また, 過去に幾度となく大雨になると外川, 内川をまたいている, 南畑, 宗岡, 新倉と続いている広大な田畑が外川の出水によって冠水していたのであるが. 明治政府の治水事業で, 外川, 内川の河川改修工事も水運の衰退にわをかけた.

水運途絶を決定的にしたのはこの改修工事に伴う, 昭和三年の通船禁止の県令ではあるが. 実際には, 新河岸川に並行して走る東上鉄道 (川越—池袋) が大正三年に敷かれた事に拠る. 当時鉄道関係者たちは船運を思って駅を河岸場近くに計画したらしいが, 船頭始め船運者たちの猛反対にあい, 今でこそどの駅前も賑っているが, 当時は人里離れた所や, 林の中などに駅を設置せざろうえなかった. 現在の上福岡市に有る, 三富や十四軒地域などからの荷を扱った福岡河岸, 養老橋を渡った対岸の橋本屋の醤油専門積み出しの古市場河岸が, 今でもひっそりと昔の面影のまま佇んでいる. 昔その河岸場に出入りしていた荷馬車が, 出来上がった新駅の上福岡駅が取って代わり, 貨物車からの荷の積換作業した敷地は, 現在もバス発着所として残っている.

貴の父は船頭の旗がしらとして鉄道敷地の反対や, 内川の大改修工事には猛反対をした. この船頭達と, 土地の工事人夫たちとの争いは今はもう歴史のなかに消えてしまっている. 父は息子の貴によく語ったことがある「俺の小さい時には親じき達が, よそ者の船頭たちの余りの無法さに追い払う争いをしてな」それから内川にはよそ者の船頭は入ってこなくなった.

今度の争いも同じだが, もう駄目かもしれん「何しろ荷が無くなっているからな」. 貴が十八才の時である. それでも親じが寝込むまで親子は船頭稼業を耐え忍んでいた. おやじの棹さばきは無言であったが, 怒りに満ちているように貴には思えた. 自分の子供の頃はもっと笑顔の棹使いであったのに. あっちこっちの河岸場の回漕屋が廃業して行くのを, なかには河岸場そのものが荒れるにまかせた廃場となってしまった場所もあるが. 往時の繁栄を知っているだけによけいに親じは我慢が出来いのかもしれないと, あの親じの顔は涙を隠していた顔だと貴は二十二歳になったときはじめて察した.

「貴さん !, 新倉の河岸で親父さんが倒れたらしい」福岡村の廻船問屋吉野屋の手代が, 一報をもって駆込んできた. 丁度, 貴は廻船問屋吉野屋の座敷に独り寝転んでいる時である. 「貴さん !, 駅だ, 駅だよ !」, 背後からの手代の言葉にギックとし, 顔は引きずり身体が硬くなった. 貴には三人の兄弟がいた. 彼が一番上で, 後の二人は東京え出て一緒には住んでいなかった. 駅へとリヤカーを引きながら, 彼はその出ていった弟たちのことが不思議と胸に浮かんでは消えていた.

東上線の志木駅で, 菊池敦子は電車の発車までの間ホームに降りてみた. 駅前の広場は閑散としており眠っているような風景である. うっそうと茂った木々の合間に瓦屋根が二〜三軒見えるぐらいであり, 動いている物といったら, 小鳥や犬, 猫ぐらいである. その小鳥のさえずりが敦子の耳に聞こえた. それに鶏の声も聞こえている, それらの光景の中で, かすかな内川の匂に肌を触れて彼女は始めてほっと安堵した. 敦子にとってその心の和みは東京での七年間の生活以来である. その匂の含んだ微風に揺れている目の前の小枝には, 咲き終わって新芽の葉が出ている桜へ, 安堵している彼女の視線がくぎずけになっていた.

駅え向かってくるハッピ姿の一団の騒々しさに, 乗客達が何ごとかと目を遣り始め, 敦子も一瞬の白昼夢から覚め, 騒々しい方へと心が移った. 三上に丸が囲ってある印半纏は, 父によく連れられて行かれた席でそういった印はんてんを見ていたから, すぐ三上建材店のものだと敦子にも分かった.

なにかしら? 彼女も興味をもったが. 残念ながら五〜六人の男達が大事そうに運んでいる輪は, 一両前の車両へと吸い込まれていった. どうやら輪の中は怪我人のようであった. 貴親子は敦子も知っていたが, けが人がまさか貴の親とは敦子も思いも及ばなかった.

敦子の父は, 生れた子が男でなかったことにがっかりしていたと母に聞いた. 母はそれをいつも気にしていたし, 敦子はそのせいか父に反発して男のように父の仕事を手伝った. 敦子が跡を継ぐ気になったとき, 何よりも母は喜んだ. 父は, 女医菊池先生かと苦笑いしていたがその目の奥に嬉しさを潤ませていた.

もっと東京で勉強していたかったが. 父がめっきり弱くなったこと, 特にこの三年間, 自分が帰っていないことに, 寂しく増ます気弱になってしまっていると, 母の手紙が敦子の元に届いていた. 以前の敦子なら, 私に勉強が必要なことぐらい分かっているはずよ, 父も男でしょう自分で乗り越えるわよ, とやり過すことができたが. 今の敦子は医者としての自分に悩んでいた. 勉強は此所までといったことはなく, より新しい知識えととどまることはなかったし. 実際の病院の中では, 病よりも権威が優先し. 学びの灯として東京え出てきてみたもののふと気ずくと. 東京が欲望の生き物と化し全てを飲み込みながら大きくなっていく. 敦子は自分もその得体の知れない生き物に飲み込まれてしまったと思い始めていた.

人間でありたい, が, 生きていくためにはこの欲望の世界には入らなくてはならない. 人間が群れの動物でなかったらと, 敦子は思ってみた. もし, 自分が単独で生きる類なら自分の生き方ができるが, 現実には私は単独行動の虎や豹ではない, ライオンと同じ様に群集で生きる人間なのである, でも, 汚いのは人間ばかりでない, 群れで生きる動物は殆ど汚いのじゃないのかしら. 母からの手紙に敦子は少し東京を離れてみることにした.

誰もが東京へと憧れるのに今の私は違う. それに東京と言う, この得体の知れない生物がさらに集まってくる全てを飲み込んで, より大きく渦巻いていきそうな気がしてならなかった. 自分はその渦に負けたみたい. 池袋駅で陽日をあびながら, 帰郷する敦子の心はいっそう気落ちしてしまっていた.

埼玉に入って始めて志木駅で敦子が触れた光景, 自然の大地のままで暮している人々. まるで時間が止まっている様な生活, そんな風景画を見ているみたい, この人生の生活—何時何分と言う様なものでない生活, あれは確か大雨の後の日の出来事だった—とかだと彼女は思った. と同時にこの電車や街道筋があの渦を, 霞を毎日毎日運んできている. 私も東京に汚染された人間だと自分を責めた.

上福岡駅に着いたら敦子は貴の父親を, 自分の医院に連れて行き父に診てもらおうとした. 父なら外科の心得もあるし, 反目して

いた船方と父の仲直りの機会だと感じて一層父に診させるべきだと決心した．五十歳を越えた貴の父親が瞬時を忘れぬ痛みに，なすすべもなくただ必至に堪えようとしている．敦子は自分が医者であっても，これをどうすることも出来く，ただ痛みに負けないように言うだけである．自分は一体何をしてきたのだろうか？，何時もの様に敦子は無力を乗り越えるしかなかった．

「何で，船で来なかったんだ！」

集まっていた吉野屋の手代達から，一人離れて黙し，汽車の来るのを待ってい貴の最初の言葉が三上印半纏への罵倒である．

「何だと！ てめえの親父を連れてきてやったのに，礼も言えねいのかよ!」

「ふざけるんじゃねえよ，三上，てめえもかっては船頭の端くれだろうが．船頭が電車に乗ってどうすんだ，この馬鹿が!」

「何だと，この野郎! 貴様の親父が死ぬか生きるかの瀬戸際だろうが，船に乗せたら死んちゃうだろう．この馬鹿」

「おお，それで結構，船頭がな船で死んだら本望だ!」

「この野郎! てめえ自分の親を殺すきか，ふざけやがって」

そうは言っても三上の手代は売られた喧嘩を買う気にはなれなかった．リヤカーの荷台の布団に親父を寝かせて引いていこうとする貴に，まさか殴り掛る訳にはいかなかった．貴は手伝いに来た人達を残し，リヤカーを一人で引いていこうと，かたくなにその姿勢を変えなかった．

「先に医者に診てもらったら!」

黙ってリヤカーを引いて行く貴に，敦子は気が気でなかった．

「貴!」

手代たちに混じっていた吉野屋の隠居も声をかけたが貴は黙したままだった．医者といってもこの村には菊池医院しかなかった．

「貴! お嬢さんならいいだろう．だいいち，お前の親父だろう」

貴は答えなかったが．敦子はご隠居が自分にうなずくのを見ると, 貴を止め自分の着ているセーターを病人にかけて再び布団をかけ直した．布団は煎餅布団である, それをみて敦子は何とも言えない気持になり, 風が入らないように回りを叩き整えると, 貴に声を掛けた.

「冷やしては駄目よ, 暖めてやらないと, それに風に当てないように．いいわね, 私, 家によってから行きますから」

貴の目の潤みを感じながら, 敦子は心の震いに立ち向かうように言い切った.

貴の足は木野目の渡しえと自然に向いていた．その頃になると, 昼と違って空は一面寒々しい気を帯び, 辺りに冷気が漂い始めていた．小屋を仕舞いかけていた渡し守の目に貴の姿が映った．雀の一団が空のあっちこっちを覆い隠しながら飛び回っている, 渡し守と貴はそのうるささに時折話を止ぎらせて, 空の中で一団が広がったり縮んだりしながら群舞しているのを, どちらも言葉なく眺めては茶碗酒を口に運んでいた.

「あんなに自由に振る舞えたら, 本当に気分が良いだろうな」毎日暮れ霞の夕空に繰り返され空の光景に, 渡し守は呟いていたが. 貴の酒はそんな生易しい酒ではなかった, 嫌味というか憂さが心の底へと沈み込む酒に近かった．なにもかにも気にくわなかった. 「自分の心を殺して事の大事に当たれ」か, 酒の代わりに貴は救いを飲み込みたかった.

親父の病は酷くなる一方で, 熱の下がった今では, 両腕がかすかにしか動かなくなり, 辛うじて歩くことが出来るだけ助かったような感じである．そのころから, 貴はますます物言わなくなった. 呑みほした酒が喉を通り胃袋に入ってカッアと熱く燃えている. 貴は更にグイグイと煽った．押し殺していた「全てが気に食わなく思う心」が腹の内でメラメラと一緒に燃えてきていた.

夕空の中は雲だけが浮かんで流れており, 暮霞が一段と色濃く染まり始めていた．気ずくと, 渡し守が小屋の残った後かたずけをあたふたと酔いながらしており, やり切れない隙間風が貴の熱くなっている腹に吹き込んできた.

船頭達の「鉄道 (東上線) が敷かれたら船運は終わりだ」の懸念は現実のものとなり, 鉄道の便利さに船運は勝てなかった．それは徐々にといったものではなく, 荷駄の運賃が船荷賃と同じになると, その日の予約の有った荷までが鉄道へと流れてしまい, 廻

船問屋は一日にしてガランとなり, 船頭達は噂以上の凄さに成す統べもなかった.

その日の貴は四千貫の塩を積んだ七十石平田舟で上げ潮を待って花川戸を出た. 新倉河岸の荷舟が荒川河口から新河岸川へ引く, 曳子から下り船がなかったことを聞くと, 七十石平田舟を一刻も早く吉野屋えと気が急いだ. 翌朝引又河岸には, 上りの彼の舟しかなかった. 井下田屋の手代らの塩を降ろしている作業にも元気がなく, 誰一人として話をするのが怖い気持に駆られていた.

「貴! これが最後の荷かもしれないぜ」

回漕店に集まっていた船頭仲間の声に, 貴もそんな不安を感じていた.

「これからどうするんですか? 」

貴は聞いてみた.

「そうだな—, まあ船頭を止めるしかあるめえ. 荷が無いんだから, どうしょうもあるめえ」

「そうかと言って, 汽車をひっくりかえす訳にもゆくめえでえ」

貴は気に掛かることがザクリとえぐり出された気がした. 井下田回漕屋に集まっていた船頭達も何気なく言った言葉にハットした.

「貴! 早く帰ったほうが良い」

吉野屋回漕店の船頭かしら貴の父は血の気の多い事で川沿いでは恐れられていた.

「しっかり捕まっていろよ」

貴を後ろに乗せると馬方は鞭を入れた. 馬上で馬方の背をしっかり掴みながら貴は「船頭稼業が終るなら, この引又河岸の様に静かに消えたほうが良い. 間違っても, 争い事でお仕舞いにはしたくない」と揺れていた.

今では, 古市場の方から養老橋を渡って右手に折れていくのが幹線道であるが, かっては, 左手に折れて吉野屋と江戸屋の間の道

幅が亀久保や所沢えの幹線通りであった．今日この辺りを歩くと，往時の面影を残したまま，時間に取り残されたように侘ずんでいる．此所で貴親子の死闘があったことなどが，まるで嘘に思えてくるような時間の過ぎるである．

東上鉄道を施設するさいにはその荷の運賃は向こう五年の間は舟よりも高くする事に関係者の間では約束事になっていた．その間に海運から汽車運へ変革が大方の手打ちであったが．実際に汽車が通って半年も経つと，約束は反故にされ同じ荷の運賃になった．しかも汽車のほうは，荷を駅まで行き来する運賃まで含んでいた．

それまでは荷の河岸場までの行き来は馬方の配慮であり，舟運賃とは別個のものであった．つまり鉄道のほうが，早くしかも大量に一度に運べて，その運賃が舟運より安いのである．回船問屋の寄り合い衆は東上鉄道の本社に掛け合いに行ったがらちがあかなく，今朝になってとうとう鉄道のほうは実質の値下げをしてきた．吉野屋の主人も寄り合いで東京に掛け合いに行っており，留守を守って吉報を待っていた船頭たちに，この鉄道の一方的な行動は怒りを誘うものである．

船頭頭の貴の父は午後になると，それまで押えに押えていた心を押え切れなくなり，駅え押しかける決心を固めた．もっとも昼近くになると，船頭らの不穏な空気を察して村の有力者や鉄道関係者らが駅えと集まってきていたが．村の街並は家の戸締まりをし，今度こそどちらとも無事には済むまいと，鉄道と船頭の争いを不安げにひそひそと話していた．

川崎村の畑中を船頭頭を先頭に十五人の集団が駅へと向かっている．日は高く辺り一面の畑は豊作の証のように，菜や緑の葉が青々とふさっている．馬上の馬方が貴に聞いた．

「どうする?」

「前に出してくれ！ 」

馬方は集団の前方に塞ぐように出ると馬を止めた．馬が恐ろしさにいな鳴き後退りしている．

「行ってくれ，後はいいよ」

「しかし．．．．．．．．．」

手綱を抑えながら去りかねている馬方を，貴は巻き添えにしたくなかった．鞍に取り付けてあったむしろ包みを取ると．その包み

見せながら井下田屋の旦那にこれを無断拝借したとお伝え願います．先頭の親父の姿が見えてきた．

「おお, 貴か．お前志木河岸にいたんじゃないか」

「急いで戻りました．頭, 止めて下さいよ．お願いします」

「そうか, それで飛ばしてきたのか．なあ, 貴よ道理を通さないとな, 俺達船頭は新河岸舟運を守ってきた故人たちに顔向けできなくなる．死んでよ, 会いに行けなくもなる．」

「頭! 」

貴は目が潤み, 後の声が出なかった．

「頭! 」

「駅の奴等に思い知らせなくちゃ．約束を反故にされたまま何も出来なかったでは, 俺達はお仕舞いだぜ」と後ろのほうで気勢の声が上がった．

列の中には貴には顔見知りも馬方も混ざっていた．

「頭, 馬勢は駅にも出入り出来るんだ．巻き込む事は無いだろう」

「頭！」

貴は頭に頼んだ, 駅へと向かう集団の輪が止まった事によって, 噂を聞きつけて加勢に駈け参じた人々が一団に追いつき, その輪が頭と貴のやりとりを息を飲み込んで見守った．

「若, あとの事は若にお願いします．わしらは右から左へ『はい』そうですかとは, 頭と同じ受ける事は出来ない」

輪の中から声が出た．

「貴, 聞いたか．道を開けるんだ」

貴は死のう此処で死のう，そう決心すると覚悟ができた． 手に持っていた包みを開くと井下田屋から拝借してきた日本刀を取り出して構えた．

「そうか, じゃ, お前をまたいでゆくぜ」

「頭! そいつは, 頭! 」

集団の輪から震え声がかけられた.

船頭の頭である中島喜三郎は, 我が子の貴を無言で見つめた.

「死ぬきか」

頭と言うより, 貴には親父の響きを感じていた. 「いずれな, 俺も付き合う. 後でな」と親父の心も聴いた気がした. と同時に丸太棒が唸って, 自分がどうやってどけたか何も知らなかった. が, 棒に向かった刀は棒に持っていかれ, 貴は素手にされた.

喜三郎は青ざめ暫く我が子を無言で睨んだ. 貴がそれでも退けないのを見届けると, 喜三郎は身を引き裂くように丸太棒を息子の貴へ振り向けた.

死ねる. 貴は目を瞑り逃げたい心を振り払って, 一撃を待った.

「頭. . . . . .」

目を開いた貴には, 親父が他の船頭達に囲まれて元きた路の方へ引きずられている姿である. 貴は引き下がっていく輪に膝まつき頭をあげる事ができなかった. 涙が地面にぽとぽと落ち, 死ねなかった自分をどうしてよいかも解からなかった. 「道理が不道理に負けたのだ, 不道理がまかり通ったのだ」どうしたらいい. どうしたらいいのだ. お辞儀をしたまま, 地面を見つめたまま貴は声を出して泣き出していた.

この福岡河岸での一件は, 福岡河岸に負けじと立った上流の川越五河岸にも伝わり彼らの矛を収めさせる事になる. ここに, 事の次第はどうあれ, 鉄道の揺るぎない地力がついた. その後鉄道に荷が全て移ったあと. それでもぽつりぽつりある荷 —ほとんどは, 瀬戸物の壊れたものや, ガラクタ物— を貴親子始め残った船頭達は運んだ.

家の庭に, 往診用の自転車が置いてあるのを. 酔いの目の貴は見つけ, 踵を再びもと来た道えと返そうとして, 何処へ行くか迷っていた.

「何処え行くのかえ？」

背中におふくろの声がした.

「お嬢さんが看に来なさっているのだ挨拶せんかい」

貴はおふくろのかわりに焚き技を抱えると, 自分の家へ入るのに滑稽な程おじぎをして土間へ行った. 囲炉裏の回りには串刺しにされている鮠が程よく焦げており, 部屋中良い匂である. その囲炉裏の有る板の間にござが引いてあり敦子が座っている, 奥の畳みの部屋に親父が布団から上半身を起こしていた.

「また, 呑んでいるのか. 御飯を食べたら」

丁度夕飼の支度どきである. おふくろと敦子の会話を耳に入れながら, 一人貴は御飯を口には込んでいた.

「それはお嬢さんので, お前のじゃないぞ」

奥から親父の世話をしていたおふくろの声が飛んで来た. 囲炉裏から手を引っ込め, 貴は自分のお膳を片付けた.

「貴, お茶を入れんかい」

おふくろの声は遠慮なく, 土間へと立った貴に強要している. いつもは食事の後は寝てしまう彼ではあるが, 敦子がいる以上, それも出来なく女どうしの話をおとぎ話のように耳に心地よくいれ, かたわらのタンスに背をよりかけてうたたねし始めた. 酔いが貴を一気に夢の世界へと連れて行った.

敦子は自分が幼い時から貴に守られていると, そう思わずにはいられなかった. 今晩も貴は自分を送るはめになってしまっている. 敦子が小学生の時, 貴にいじめられた事があった. それは彼女にとって忘れられない思い出の一つでもあり, 今でも, そのときの傷跡が, 半袖になるたび腕から顔を出しいる.

宿題の作文に敦子は, 河川が改修されて皆が洪水に会わないようになれば良い, 早く汽車が通るようになれば良い, といった様な事を書いて先生に誉められた事があった. それから二日後に帰り道で彼女達は, 貴らに囲まれてあっという間に敦子は貴に殴り倒され, 大人が走り寄って来ても貴な乱暴は止まなかった.

敦子は自分の父にも, 「お前が悪い』と怒られて家でも又大声を上げて再び泣きだした. 泣きじゃくる自分い父は更に怒った「他

人の事を察しないお前が悪いと」きつく叱られ, 船頭の一軒一軒に謝りに行ってくると父の怒りは収まりそうも無かった. 父がそのため着替えている時, 貴の親が謝りに来た. 親の手招きで玄関に入ってきた貴を見て, 泣いていた敦子はビックリした. 顔が真ん丸に青く腫れあがっているのである.

「お嬢さん, こいつに良く言い聞かせましたからもう大丈夫ですよ」

それでも泣かずに唇を噛んでいる貴に敦子は驚いた.

「貴! これから毎日お嬢さんを家まで送るんだぞ」

父がせめて貴を看るからといって帰るのを止めようとしたが, それではといって息子を残して貴の親は帰って行った. 父の治療を敦子は机に隠れながら覗き見していた. 父が何か言うたびに「痛くないわい, 痛くないわい」と言う貴の声が聞こえた. 貴を送ってその夜遅く父は酔って帰ってきたが. 「やはり男の子ではなくては, 男の子ではなくては」と母を一晩中困らせていたと敦子は母から聞いた.

話もとぎれ貴と歩きながら, 敦子はそんな事を思い出しながら歩いていた.

The second

今にも泣きそうな空の模様であり, 視界に入るものはどれもこれも鈍い光沢を見せて, 直ぐにでも降ってきそうな気配の風景である. 空の西の方から黒い雲が徐々に広がってきており, そんな中, 菊池親子連れは内川に沿っている土手の道を帰宅をしていた.

雨前の風が吹き始めてきても, 父の源右衛門はその歩みを速めようとはしなかった. 敦子もそれに従いざろうえなかった. 川の流れは以前よりも速くなっており淀みがなくなっていた. 広がっている田の向こうに盛土した外川の堤が眺められた.

源右衛門は辺りの景色を考え事をする様にゆっくりと歩いている, 歩みが遅いのはそのせいである. 粘っこい風が内川の葦を騒々させており, 上空は完全に黒雲に覆われてしまっていた. それでも, なをかつ源右衛門のゆっくりとした歩きは変わろうとはしなかった.

内川の葦の繁みを一段と騒々させながら平田舟が一隻進んでいた. その葦に見え隠れする中で源右衛門は立ち止まって舟が通り行くのをじいっと見ていた.

突然に「わ—い」と子供達の元気な囃し声に敦子は振り返ってみると, 田の畔道を学校帰りらしい五〜六人の子供達が土手へと向かって走ってくる. 土手に登り着くと, 子供達はランドセルや手にぶら下げていたものを道に置き, 平田舟にむかって石を競って投げ始めだしたのである. どれも舟までは届かず水面にポッチャ・ポッチャと力尽きて落ちている. 敦子はビックリしたが, 父が烈火のごとく怒り出して子供達のほうへと走っていった.

「わー！」と子供達は, 走ってきた道の方へとバラバラに戻り逃げ出した. 相変わらず舟は無表情に水のうえを滑っている. 「貴さん」敦子は胸が痛くなった. かって貴を餓鬼大将に仰いで遊んでいた人達も, 今では貴を不思議と敬遠している. 小さい時から頭が上がらなかったせいでもあろう, 貴もそれを知っているため顔を会わせるのを自分から避けているみたいである.

「貴さん」敦子は, 小糖雨の降りだしてきた中で人の世の様に胸は更に痛んだ.

「学校へ行ってくる! 」

戻って来た父の怒りは治りそうもなかった.

「新しく来た人達の子供達よ, 地元の子ではないのだから」

「地元の子で, あんな事したら, 親たちが黙っていないわよ」

敦子が言ってみても. 父には馬耳東風であった.

「よそもんがめっきりと増えてきたわい, 困ったもんだ」

「お父さん！. 子供の事に親が口出してと, よそ様に笑われますよ」

「笑われてもよい. とにかく学校はいったい何を教えているのか」

源右衛門は, 自転車に乗り敦子を置いたまま学校へ向かいだした.

敦子は貴がなぜ船頭を止めないのか, その理由が分からずにいたし, その事が何時も自分の心の片隅に引っ掛かっていた. 霧雨は敦子の瞼に付着するほどの強さとなってきている.

「お父さん! 」

敦子が呼んでも源右衛門は振り返えりはしない. 敦子は仕方なく家に一人向かった.

夏の日差が強く大地を照らしている. 土の道はカラカラに堅くひびが走っており, 午後の休み時でも, 汽車が着くと肌を黒く焼いた強者たちが貨物車から荷の積み込み降ろしで駅の側はあっという間に戦場となった. 馬も汗で肌を黒く濡らしている. この作業が遅れると, 客車の人々も発車までその分待たされるのである. 自然に罵声や掛け声が辺りに大声となって行く. 特に上りの汽車のときには全てが喧嘩腰で進むのである.

汗すらも抜くう事ができない彼らの唯一の楽しみは, 酒を呑む事を除いて敦子先生に看てもらうことの自慢話である. 彼らは一寸したかすり傷でも菊池医院へと走ったし, 彼女は彼らの人気の的であった. 自分の子供の怪我の時など, 我先にこれ身よがしに大手を振る舞っては自分の女房に怒鳴られていた.

—蝉 し ぐ れ 夏 の 白 暮 の 夕立 か—そのうるささが村の家々を襲い, ひび割れの入った道という道の上を村人たちが行き来している. 鉄道が施かられてからは村に活動的なうねりが出てき

た．若者達が東京へと働きに出ていくし, 畑仕事に残った人々も畑に精を出し始めた．作っても作っても東京へと収穫物が吸い込まれ, 時には自分たちの食べる物さえ出荷しなければならないほどである．

山林が潰され新しい人達が住み始めだし村の人口が目立って増えてきていた．以前よりも収入が増えた事が村を変え始めていた．言葉も変わった． 今までの『東京へ下るが＜東京へ上る＞』と話すようになったのがその代表であるが．日常生活が時計によって動き, はっきりと人が秒分に支配され始めてきた．せちが無くなったといえばそうであるが, 汽車が定刻より少しでも遅れる様な事にでもなれば, 駅長え怒る人達が出てきていた．が, それよりもこれよりも生活の向上や便利さに村人が夢中になっていた．

鉄道と同時に行き渡った, 電灯の明るさが新しい時の知らせを告げているのだと, 文明の物質を追い始めだしている．若者のエネルギーに老いの精神土壌は片隅に追いやられ, より豊かさをもとめて東京へと, また, 自己の中へ他人の言葉を聞かなくなった村が走り出している．この, 人の川の流れを誰が止めえようか! この流れの行き先は, あるいは危険だと察して言うことが出来たとしても．社会は走り出した流れを止める事は, 例え王様であろうともそれは出来ない．

何万匹という鼠の暴走の行き先が海へと分かっている走りであっても, その走りから逃れる事は一匹の鼠すら出来ない． 生物の上に流れている, この自然の原理原則は, 人間も又その一方を形造っている動物界の一員であり, 天空の宇宙から我々人間を観察すれば, そこにその答えは自ら生れよう．我々の持っている理性と知性がこの原理が何であるかと追及している, その科学から生じた文明を人々は饗宴し, その哲学から生れた思想を生きるバックボーンとし, 人間はこれからも生きていく．

原住民が言った『神が我々に生きる喜びと神えの感謝のため, 年に二〜三回の祭りを行なうように労働を教えた．我々はそれ以上の労働をする必要があるのか? 』この他に任せに信じ切った（生まれ立ての）卵のような言葉が, 膨大な量の文明・文化のなかに埋れてしまっている．宇宙の諸現象の観測で, 人間は一つの心理を掴んだ「始めが有れば終りが有ると」なら人間群の終焉は何時だろう? その時こそ人も又他の物と同じく, 滅び行く物の理で美化されるに違いない．

菊池医院も他と同じ様に前よりも忙しくなった．珍しく女医であり．又, 美人である．そのせいでもなかろうが, 父の源右衛門は

患者が増えた事をそうとしか取らなかった．今までの自分の経験の治療よりも．学問から得た新しい治療方法や, 新しい薬をこの娘は使いすぎると源右衛門は苦々しく思っていた．その新しさがお客を次から次えと呼んでいるという事実を源右衛門は思いたくなかった．

いきおい一日の終ったあとの夕食時に, 激しい意見の食い違いからの喧嘩が待っていた．そんな中で如何してもやり場が無くなった時に, 敦子はいつも貴の父の往診に出た．自分自身それがなぜなのか彼女にも分からなかった．熱風の中の蝉しぐれが消えて, 涼風が立ち込め始め日暮らしがかすかに聞こえる様になった季に．

「私はお父さんの看護婦ではありません! 私だって医者なのですから! 」

そう宣言すると敦子は看護婦を新しく雇い入れた．

「俺を追い出すのか!」

父の言葉を彼女は意に介さなかった．そんな日々の中, 珍しく村長が父に会いに訪れた．『とにかく校医を娘に譲れと』来た, 数日前からの娘との喧嘩が喧嘩だけに源右衛門は真っ赤になって怒った．

「どいつもこいつも, 俺を老人扱いにしゃっがって! 」

が, 村長は平然とし．「とにかくこれが, 大方村の人々の意見であると」父の怒りの納まりを待っている．父が怒りのまま席を立って部屋を出で行くと母がその後を追った．さすがに敦子も心配になり席を立とうとすると, 村長は敦子の腕を掴んで首を左右に振った．

「お母さんに任しておいたほうが, 二人にしておいたほうが良い」

言いながら敦子をもとの席に座らせた．

「このことは, 二か月前程から貴方のお母さんの耳に入れておきましたし, お父さんのほうにも入っていたはずです」

敦子はそういうやり取りがあったなど, この場で始めて聴く話である．

「源右衛門が . . . . . .」

父を呼び捨てにして更に村長は続けた.

「あまりにも未練がましいので. 今夜という今夜は直談判に来たんですわ」

ここまで言って村長は口をつぐんだ. 「確かに父母の二人にしておいたほうが良い, 自分は関わらないほうが良い」と敦子もうなずいてみたものの気にはなった.

「ところで, 貴方に頼みが有るんです」

お茶を呑みながら暫く所在なげに居た村長が敦子の方え向き直った.

「この村や人々のため, 村長としてこれからも働くつもりでいます. そのためにもこれからは, 貴方に一肌も二肌も脱いてもらわなければ」

そう言って村長は敦子に深々と頭を下げた. 自分よりは年長の村長が, その人が年重もいかない自分などに頭を下げている. 自分の父母への想いよりも. やはり「この村で立派な医院に・医者になるのだ. そういう自分の心は誤りではなかった」と新ためて敦子は自信を持った.

若き日の源右衛門が情熱を傾けた「この村の外川による出水を無くしたい, それに鉄道を敷きたい」それらは彼の晩年近くになって実現した. どちらも船運に関係している事であったが, 村の多くの賛同を得た. 舟にしたところで川が荒れてはどうしょうもなかったのであるが. 源右衛門の情熱は共存共栄であった. 河川が改修されれば, 舟は出水に関係なく運航できるし, 鉄道が通っても船運がなくなるとは思ってもいなかった. 鉄道と舟それに街道これらの三位一体が相合して行くと.

計画が実現されていくと地元の手を離れ, 事が成ってみれば, 鉄道と河川改修が手を組んだみたいになり舟は追い出された. 鉄道に荷は奪われ, 河川改修に舟の運航は止められてしまったのである. 「騙された! 」船頭始め船運業者の怒りも無理もない. 彼らの怒りは爆発する事なく恨みとなって心の底に沈んで行った. その思いは源右衛門にしても同じであったのかもしれない. 彼は苦痛から逃れる如く, 娘を東京へ出す事で (地元におかないことで) 少しは心を軽くしたが.

「人の世も, 自分の人生もままならないものである」俺に出来た事は娘に, この土地のしがらみからできるだけ離してやることぐらいか, これが, 長年の結果手にした人生の答えかと思うと源右衛門は我が身を自嘲した. その自嘲の結果が, 戻ってきた娘は自由人となって, 俺を苦しめている. 因果応報にしては, いやいや, 俺が背負う人生なのだ. あーあ! 俺に男の子がいたら, 源右衛門は自分の生き先を見失っていた.

「此の頃お父さん少し変なのよ」

棟続きの診察所から昼食に戻ってきた敦子に母が言葉を添えた.

「変て! どういう意味よ? 私には変わらないと思うけど」

「何だか急に優しくなったのよ」

敦子は母と御飯を食べながら, 又, 父がいないのに気づいた.

「良いんじゃない. だって今迄, わがまま仕放だいだったもの, お母さんもそれで苦労したでしょう」

「それは良いけど, あんまり急に優しくされたってねえ, 何だかこのまま行ったら, お父さん, 生気を無くす様な気がしてねえ」

最後の母の真剣な言葉に. 「そうねえ」と敦子は相槌をうつしかなかった.

「男って, こうなると駄目ねえ」

敦子はそう言いながら心には別の事「無言の立ち居振る舞いの貴の姿」を浮かべていた. 敦子の思い「立派な医院へと立派な医者にと」は入院設備の整った医院にしなければと歩き出した. 鉄道が通った事で, 村の人々も東京の大きな病院に診てもらいに行く事が出来る様になった. だからと言って, この村に医者がいら無いという事でもないと, 敦子はむしろだからこそ此処にも設備の整った医院が必要であると決心は堅かった.

その自分の人生の完成のためにも, 東京から帰ってきてから何時も感じている, 心のわだかまりを取り払わなければと思う様になった. 敦子がその頂点に立っている, 貴の父を東京に連れていき医者に診せなければならない. そうしなければ自分をよそ者にしている彼らには入っていけない. それが出来なければ大きくした医院も意味もないと, 彼女は自分に誓った.

自分の人生を体当りさせれば「貴さんは分かってくれるはず」と敦子は診察が終ると, 貴の家へと歩き出した. 日が沈んだ道を, ひびの入った土の道を思いに駆られて一人歩く敦子の身に, 周囲の樹の繁りの内から日暮しの泣き声がまるで悲しく聞こえた. この道を何度, 私は行き来したのであろうか?

あの駅の出来事以来, 最初は蛇に睨まれた蛙の様だった. 辺りが見えてきてからは自分の意志で, 深くは入ろうとすると, 何時も貴に跳ね返された. 敦子の心がめくりめくっていると, 一瞬心が吸いこまれ「父は, 貴さんに菊地医院をの後を継がせたかったのじゃないかしら? 」, 遊んでいても私と成績を競っていたのだから, 憑物はすぐに落ち, 立ち止まった敦子はすぐに歩き出した.

敦子の足は貴の家が見えるところまで進んでいた. 深い竹薮が道を隠しその向こうに家の屋根と白壁が夕暮れにひっそりと照りかえっていた. 道を覆っている竹薮の暗さの中から, 家の異変に彼女はようやく気付いた. 何時も見る夕飼げの煙は昇っていず, 土間に通じる戸口は開け離れたままになってたし. 火の気が感じられず, 家に向かって近付けば近付くほど, 人が何か息を殺しているような, 常とは違った様子に敦子の身体は緊張した. 今は駅に出入りしている馬方が敦子を見つけて彼女の歩みを止めた.

裏の竹薮で貴の父である喜三郎が首を括った事や, 貴が見つけた時は既に遅かった事など. 馬方の話に敦子は唖然とした. 何処をどう歩いてきたのか, 右手に大杉神社が有った. 真っ赤な天狗の面が御神体の航行安全の水神であり. 同社拝殿に奉納された額には, 福岡河岸関係の船頭他, 新河岸川 (内川)・荒川 (外川) 本流・利根川・綾瀬川・江戸川・絹川の船頭九十六人の名前が記入され捧げられていた. 敦子は貴の姿をそこに認めた. 拝殿の前の地面に貴は腰を下ろしていた.

「貴さん! 」

敦子は貴に怒りを覚えながら叫んだ! が貴は振り返ろうとはせず, そのまま地面に座ったままでいた. 敦子は其れにも腹が立ってきた.

「何か言ったらどうなのよ! 」

貴は黙したままだった. 敦子は貴のほほを殴った. 一回, 又一回と, 手のひらが熱く感じたが敦子はそのまま殴った. 貴は敦子の為すままにしていた. 感情の爆発して疲れたのかふらふらとよろけ, そのまま貴を見やって敦子は鳥肌が立つ様な恐怖を感じた. 貴の面影が凄じい人生への恨みと憎しみの面影に一変していたのである. いや, 敦子がそう感じたのである. 彼女は弾き飛ばされ,

その憎悪の手が自分の首に伸び．殺される！敦子は一瞬に感じた．貴の伸びた手が首をぐいぐい締め付けてくるのを感じた．殺される！！

「貴．やっぱり此処にに居たのか」

吉野屋の隠居の声がし．と同時にその堤灯の明りに照らされた貴の姿は元に戻っていた．

「母親のところに早く帰ってやれよ」

片方の手に持っていた蝋燭に堤灯の火を移して貴に渡し．ご隠居は震え立ち竦んでいる敦子の衣服の汚れを払いだした．

「ご隠居！．．．．．．．．．有り難う御座いました」

敦子を促し，大杉神社を出ようとしている二人に，貴が始めて口を割った．

「なーに，いいっていう事よ」

隠居は貴を見返し，返事をしながら敦子とともに出ていった．

世が世なら貴の父の葬儀は盛大なものになるのであろうが．船運が寂れてしまった今，それは惨めというほどひっそりしたものである．そのうえ貴は鉄道に関わっている人や村の有力者の焼香をことごとく断わった．それでも他の川沿えのかっての船頭たちが集まってくれた．

源右衛門は遠く焼場の煙突が見える岡に腰を下ろし，眼下に田畑の中に立ち上っている煙をじいっと見ていた．田畑には草むしりに余念のない人達が点々と動いている．煙突から立ち上っている黒い煙は，空に広がりやがて薄くなって消えていった．福岡河岸船頭頭である喜三郎は五十八年の歳月をこの地上から消えた．

それから，一ヶ月もたたない昼頃であるが，御飯を食べている敦子と母の前で突然笑い出した父源右衛門は，そのまま狂い出し源右衛門とその世話のため母が小諸の里えと福岡村を後にしたのは，未だ中島喜三郎が土に帰すまえである．

滅び行く物の美しさには何人とも勝てはしない．敦子の人生の目的をもってしても，延々と三百年も続いた舟運とその歴史を乗り越えることは出来なかった．世間的なはた目には，新築の成った医院は敦子の素晴らしさを映していたが，彼女自身の心は疲れきり，その身をずたずたにされていた．新しい医院には父母もいなく，その上，彼女は貴の凄じい心の渦を見てしまった．

その敦子を唯一救ったのは，この医院で生来る赤ん坊の産声であった．敦子は産まれ出た赤ん坊に接するたび，何時も生命へ驚きと感動に襲われた．そのうち敦子は滅び行く物よりも生いずる物の真実の大きさを知った．

この事を敦子は貴にも知って貰いたかった．彼女の心の内には，あの人が仮面を剥いだ時に．この村にとんでもない事が起きるのではないのかと，恐怖の思いがこびりつき，生まれ出る生命の美しさを，貴には切実に知ってほしいと思った．が，彼の親父が亡くなってからは，敦子は貴との関係はなくなってしまった．

無理に会おうとしても貴が避けた．彼女は自分一人が人生の驚きや感動を独り占めにしていいとは感じていなかった．貴という最もそれが必要な人がいるのだが．敦子には貴にそれをぶつけるだけの力が，もう湧いてはこなかった．

貴がときおり汽車に乗っていると，そんな噂を敦子の耳にも入った．何処へ行くのにも舟を漕いた貴が，汽車を利用したとは，日にちが過ぎるうち敦子は世間が諭っているような，彼の心境の変化ではないと感じた．彼の心の奥底に何があるのか，おそらく誰も知るまいと敦子は思った，同時に，村への恐ろしい災いの前兆かもと敦子は震えた．

父がこの医院を建てたようなものだわ，それなのにまるで自分が建てたように思い込んでいて，心境の変化は敦子の余裕なのかもしれない．敦子がもたらした，医院で赤ん坊を生む事は．彼女が東京で学んでいた当時，その病院で実旋されていたものである，それを真似ただけである．

東京で流行っている「病院で赤ん坊を生む」事が．おらが村でも出来るのだ！とばかり．わざわざ嫁いだ娘を里帰りさせ，敦子の医院に入れる騒ぎになるほど近在所では評判になった．

敦子の専門は内科である，その知識が助産婦を心服させ，それが口伝てに村々の母親へと信頼が広まったらしい．敦子は何もかも忘れるように治療に入れ込む日々を送るようになった．東京では挫折した，人と治療との関係を「医療に立った治療でなく，患者

に立った治療が」を敦子は目指していた.

今日も夕暮れ迫る内川の上空を雀の一団が乱舞している, 延々と続く南畑の田に野火の煙が立昇るようになった. 村々の家をも包みこんでいる薄紫の霞みが, 暮ががった景色に一層人恋しさを漂わせている. 内川に舟の面影はなく水の面が暗闇の中, 鈍く光り流れている. 草がうっそうと繁っている河岸場には人影もなく, かっての繁栄の跡地を今, 夕闇に隠そうとしている.

村に新しく住み始めた人々にとっては内川の事など関わりはなく, 夜の風が内川に茂る葦を鳴らし, その音色がもの悲しく泣ける様に吹いていた. その泣ける音が夜風に乗って残暑酷しい家々を街を走り, 開けはなれた窓から家の内に侵入し部屋部屋を巡ってやがて外えと抜けて行く.

真昼に太陽のギラギラと燃えた熱は夜になって正体を現わし. 寝苦しい夜がまるで人の世の罪を償いさせているが如くである. 敦子の開けはなれてある寝室の窓から内川を渡った夜風が侵入していた. 窓から入り込んだ風は, 箪笥の上に並んだ人形に当たっている. 内川の泣ける音に接した, 患者から贈られた顔の入れられていない人形たちが, 寝ている敦子の上でざわめき出した.

「ここは何処かしら? 」見渡すかぎり赤土と砂と岩だらけの地である. 敦子はそれでも地平線のかなたへと歩き出した. 喉が乾き切り息が出来なくなりそうである, 意識が朦朧としながら意志だけは地平線のかなたにと目指していた. どんなに歩いても地平線のかなたは更に先にあった.

「もうだめ! 」喉の乾きでとうとう敦子は胸がつっかへ呼吸ができなくなり, ぴんと張った意志が切れ倒れた. 鶯やおびただしい様々な小鳥のさえずりのなか敦子は不思議に意識を戻した. 敦子の心は今までとは違って満ち足りた穏やかな休息に変わっていた. 色とりどりの花が咲乱れ, 手入れのゆきとどいた木立のなかを敦子は目に入った家の方へと歩き出した.

「済みません, 幸せの国はどっちなのでしょうか? 」

敦子は尋ねた.

「その道を歩いていけば有りますよ」

夜風にカタカタと音を立てていた, 顔の入っていない人形の一人が敦子に答えた. 今度は, ソクラテスの家・アリストテレスの家・

アルキメデスの家と看板が下がっている家のまえに出た.

「あの. . . . . .人の幸せを掴むのには何処へ行けば良いのでしょうか? 」

庭で雑談している彼らにむかって敦子はここでも尋ねた. ソクラテスが行くべき道を指差し,

「今日はこれで二度目である」

と語った.

「二度目! 最初の人は誰なのでしょう? 」

敦子は訊ねてみた.

「中島貴と言ったな, 『恨みを忘れる場所』を知らないかとな尋ねてきた. どの道同じ道さ」

ソクラテスは言い終るなり再び仲間と談話し始めた. 敦子は大きな森にさしかかった, 道はその中へと通じている. 密度の濃い緊張した空気である. 中を歩いていくうち, 小鳥のさえずりの中, 下のほうで母の呼ぶ声がした. 敦子は迷った, 先へ進もうか? 戻ろうか? ずっと先に貴らしい後ろ姿を敦子は見た. 母の三度目の声に敦子の気が行くと同時に敦子の身体が飛んだ.

「先生! 先生! 」

敦子は意識に看護婦たちの声を聞いた. 朦朧とした中で自分を囲んでいる彼女達が見える. 彼女らは目を開けた敦子をみて一斉に泣き出した.

「どうしたのよ, あなた達? 」

「大丈夫ですか, 先生? 」

「ええ, だからどうしたのよ? 」

敦子は寝室で呻声をあげ, 苦しそうに身体を暴れさしていた. その事を全然知っていなかった. 離れの奥くから人とは思えない奇妙な呻声がし, バタバタ・ドスンドスンと音が続き先生に何かあったのかと彼女達が飛んできたのである.

人形 —大半が背丈二十センチ程の結城や絣を着た大人と女人, 五センチぐらいの遊ぶ仕草の幼子— のノッペラボウが, 雲の切れ間から差し込んだ月光に照らされ, 部屋に繰り広げられている光景を静視している.

「そう」

敦子は完全に意識が戻り, それから深く吐息した.

「大丈夫よ, 夢を見ていたのね」

再び雲に月が隠され. と, 窓から吹き込む風向きが変化した. 途端に人形達の面影が何時もの状態に戻った. コチ・コチ・コチと時計は午前二時を十分ほど過ぎていた.

「ねえ, 皆ここで雑魚寝しようか」

敦子の言葉に, 彼女らはキャーキャー言いながら少ない毛布を奪い始めた. 敦子は窓から空を仰いだ, 月を隠す雲が次から次と流れている, 吹き込んでくる風が心地よく, 風は今までとは逆に内川の方えと去っていった.

昼近くになって, 内川を船頭四人の必至の棹さばきの平田舟一艘が流れを登っている. かっての飛切（今日下って今日上がってくる舟の呼び名）方式である. 舟の中に吉野屋の隠居が横たわって貴を覗いている. 川添いの道を行く人が現われては, 船頭たちの掛け声に何事かと注目しながら去っていく. 花の木の渡し守りが泣きながら貴を見送った.

「貴! 何とか言ってくれ! 何か言えよ！, 見ろもうお前の村なんだぞ. 貴！」

隠居の目は涙も枯れ血走り叫ぶ声はダミ声になっていた. 学校では運動会が午後の部には入った知らせの花火が白雲空にこだました.

「貴! 何とか言えよ! 」

船頭の手のひらには豆ができ潰れ, 彼らは棹を握った手を自分で開くことが出来なくなっていた.

貴の母親が仏壇のまえに放心したよう黙込んで座っており, その脇で, 吉野屋の御隠居が声にもならないダミ声でうなっている. 安否を気遣って襖を開る者は, 仏壇の蝋燭の灯に照されたその光景をみて『地獄』を覗き込んだように思え, 身震いしながら通夜の席えと戻った. 敦子が帰ろうとすると, 身ごもった娘の母親が囁くように相談してきた.

「うちの娘を先生のところえ入院させたいんですが? 」

「何か差し障りでも? 」

「ここや, 亡くなった貴さんの手前ね, おとうちゃんが何というか? 」

「お母さん! 娘さんの赤ちゃんには, ここも, 貴さんも内川も関係ないでしょう! 」

「うちに入院させてやってください, 出来るかぎりのことはします, お願いします」

「娘さんがそう言うなら, お母さん, 娘さんの願いをかなえてやってください. 私からもお願いします」

敦子の心はほとばしり, 慌ただしく通夜の席にもどる母親に頭を下げた.

通夜の席から洩れてくる船頭達の千変万化している音韻が, やがて家を後に歩き出した敦子を追い抜き, 畑や田の上をすぎ, 内川の上で風になびく葦の吹く悲しい音にゆっくりと同化していった.

The third

大地へ注ぐ夏の日差の眩しさだけは今も昔も変りなく．蝉しぐれや, 深い青空の日光のもと花から花えとヒラヒラ舞っている蝶々等, それらが昔よりは少なくなっている．川越近辺には蝉しぐれなど殆ど無くなってしまった．夏がこうである以上, 季節の移り変わりなど, その面影も薄く, 涼しさの取り方も今と昔では完全に違ってしまった．鳴く虫の音に季節を感じるなど, もう少し時代が経てば変人扱いにされる様になるだろう．

週末になると新河岸川添えにめっきりと釣り人が多くなった．堤の土止めのコンクリートに腰をおろし釣糸を垂れている幾本もの竿を見ていると, この川に舟が通っていたなど遠い昔話のような気がする．河岸場跡地に立てば, 強の者達の罵声が飛び交い, 鞭を入れられて汗を出している馬のいななく声がこの耳に錯覚してくる．

お盆も過ぎる頃, 墓を掃除に来ている一家がいる．兄弟とその子供たちで総勢九〜十人の集まりである．昼過ぎに, さっぱりとした墓地に線香の煙が昇り, 読経があげらた．高校に通っている娘の番に来ると．

「お前は特に御祖母ちゃんに可愛がられたのだから良くお祈りをするのよ」

母が脇から言い聞かせた．御祈りも済んで墓地のなか車の方へ歩いて行く家族の上に, 黒雲が出てき空を覆い隠し始め出してきている．

「ちょっと行ってくる! 」

さっきの娘が車から墓のほうへと走った．墓の前に着くと, 彼女は胸から —母が東京にいる息子の所に行ったその後の中島家の消息を調べたレポート— 折畳んだ紙を取りだし読もうとした．

「お姉ちゃんーー! 」

「敦子ーー! 」

甥っ子や母の呼ぶ声がし,

「御祖母ちゃんごめん」

そう言うなり．紙を置くと，ぺこりと頭を下げて菊池家の墓を出ていった．

風に，広げて置いた紙がなびき，彼らの車が墓地を出ると，墓の前の宙にひらひらしばらくの間漂い．やがて，風に飛びそこから少し奥にある．荒れ果てている中貴家の墓の前 —彼女がさっきついでに奇麗にした所— に落ちた．パラパラと落ちてきた雨が墓石に当たり，まるで泣いている様である．

ヒューという強い風に紙が再び空高く舞い上がり，渋滞で車が繋っている道の上を，畑の上を飛び．内川の上空に来ると，ピタリと止まり川へと落下した．流れの面に紙が落ちると同時に雨がザーと降りだして新河岸川は雨煙の光景となった．

終わり．

Comment

大正十二年の大震災で, 内川の大方の舟は東京で焼失してしまいます. 新河岸川の昭和六年〜八年期の河川改修工事で舟の運航は絶望になります. ただ, この工事によって, 花川戸まで三十六里あった曲がりくねった新河岸川が, 二十里になり, 蛇行も少なく流れが早くなりました.

この物語の最後に出てくる音韻は, 「川越船頭唄」の民謡であり, 節回しが「千住船唄」の替え唄と聞いておりますが, 私は唄っているところを聴いておりません.